

舟中子規も聞く

城野静軒

八幡山崎春暮れんと欲す

杜鵑血啼て落花流る

一声は月に在り一声は水

声裡離人半夜の舟

【作者】城野静軒（一八〇〇～一八七三年）江戸後期の学者。

熊本県菊池郡に生まれる。その生涯は不明な点が多い。文武両道

に秀で、書も詩も巧みであった。同時代の横井小楠と親交があり、「小楠堂詩草」に静軒と相唱和した詩がある。明治六年八月没す。享年七十四歳。

【語釈】

*子 規…ほととぎす 杜鵑も同じ *八 幡…京都府八幡市 *山 崎…京都府乙訓郡大山崎町・大阪府三

島郡島本町山崎の一带 *啼 血…血を吐くような声で鳴く *声 裏…声のする中

*離 人…旅人 *ここでは作者 *半 夜…夜半 真夜中

【通釈】

淀川を下り、八幡・山崎を通り過ぎれば春も終わろうとしている。どこかで杜鵑（ほととぎす）が血を吐くような声で鳴いており、花は川面に散って静かに流れている。その一声（ひとこえ）は月が鳴いたかと思われ、また一声は水の中から鳴いたかと思われる。真夜中の舟の中、旅の身にあつてひとしお思いをこめてその声を聞いた。